

せいくと

SELECT

東京ワーカーズコレクティブ協同組合 <http://www.tokyo-workers.jp>



私の仕事術

社会問題を解決するために商売をする！ & 一人社会起業家になろう

ハッピーエナジー(株)最高執行責任者 **西本良行**



東村山市在住。妻と子ども(高校生、小学生)2人暮らし。合気道4段。



ハッピーエナジー

電気代で社会貢献する NPO みたいな電力会社

東京の吉本興業で笑いと健康をテーマにイベントプロデュースをしていました。大学と共に笑いの遺伝子レベルでの効果の研究、人材育成に悩む企業にむけて漫才のワークショップ、余った芸人の老人ホームへの派遣など、様々な社会派事業の起業ばかりしていました。3.11を契機に、農業での地方再生を目指し、京都の北部で有機栽培の米農家に挑戦しましたが、村社会とぶつかって2年ほどで一旦退却しました。

しぶとい性格なので、日本一予算のない映画祭のプロデュースや地方の子どもたちが一流スポーツ選手と交流するソーシャルイベントなどを手掛けながら、「地方で勢いのある方々と組んで地域再生事業にチャレンジしたい」と、アンテナを張り巡らしていました。その中で、エネルギーで地域再生をしようする鹿児島の人たちに出会い、共に小さな発電所をつくり、全国の市民発電所を取材して配信するゆるーいウェブメディアをスタートさせました。2016年に電気代で社会貢献するNPOみたいな電力会社「ハッピーエナジー株式会社」を立ち上げました。

過疎化した地域で市民発電所を作り(主に小水力)その電気を小売りして、「子ども食堂の運営」「シングルマザーの支援」「部活動継続の補助金提供」などを行っています。商売で儲けたお金を独り占めせず、子育てコミュニティに還元することを目的に活動しています。



子どもたちと実験教室



1~3階まで、個性的なカフェやイベント教室などの店主に出会えます

大人が全力で人生を謳歌する姿を子どもたちに魅せる

活動は順調に推移していましたが、子ども食堂(現在はフードパントリーに転換)を営む中で複雑な気持ちを抱えるようになりました。

「福祉なれした大人と子どもの要求の増加と礼儀のなさ」
「いつまでも抜け出せない方々と努力しようとする姿勢」
「大人が楽しそうに暮らさず、サービスを受けるだけのお客さんとして生きている」

そんなことが気になっていた時に「コロナ禍」がやってきました。一般的には逆風でしたが、私たちには追い風となりました。公民館での「子ども食堂」が開催できなくなったので、食料品と日用品を配布する「おすそわけ Fes」に転換。在宅で社会の問題にモンモンとする方々の、家にいながらできる社会貢献活動として電力会社乗り替えが急増したのです。

そして、「大人が長いものに巻かれず、自分の人生を自分の判断で進んでいく」ためのチャレンジ(実験)スペースを作る事業を立ち上げる機会に恵まれました。

東京で個人が事業を立ち上げるのに1番のネックが、「家賃」(2番目の理由は時間がない)です。この理由(やらない言い訳)を外せば、チャレンジする大人が増えるはずだと、2021年に全方位依存型シェアスペース「八方知人」を立ち上げました。

ここなら、今の暮らしを続けながら失敗しても大火傷しない環境で自分の「副業」を試行錯誤でき、個性的な店主達(大人)が、全力で人生を謳歌する姿を子どもたちに魅せられます。こんな小さな挑戦が、画一的な町の発展に抗う個性的で人間臭い町をつくり出すはずです。

そんな思いで、私は24時間年中無休のセルフブラック労働を楽しんでいます。皆さんもなんか試してみたいことがあれば、お気軽にご見学にお越しくださいませー



八方知人

江戸川古民家プロジェクト(東京都江戸川区)

地域に根差した活動への評価から生まれた「居場所づくり」

生活クラブ生協の活動から生まれた運動グループの江戸川地域協議会は、住みよいまちづくりをめざした市民版地域福祉計画を策定し、安心ネットワークを実現するための機能づくりを進めています。その計画の一環として取り組んでいる区内にある古民家「好日荘」を使った地域の居場所づくり取材しました。

地域の実状に合わせた福祉に取り組む

1990年から地域で活動している江戸川地域協議会は、「23区南生活クラブ生協まち江戸川」「江戸川・生活者ネットワーク」「(N)ACT たすけあいワーカーズもも(以下、もも)」「環境まちづくりNPOエコメッセ江戸川元気力発電所」「ほっとコミュニティえどがわ」などの団体が連携しながら、支え合うまちづくりを進めています。

誰もが安心して地域で暮らし、働き、育児や介護もし、年を重ねていける社会にしていくために、コミュニティレストラン、ヤングケアラー支援、子育て支援、家事支援、介護、障がい福祉など様々な活動に取り組んできました。その活動をさらに進め、足りない必要なしくみを生み出すために、2017年に市民版地域福祉計画を策定し、子ども食堂や親子ひろば開設の計画を盛り込み、「あったか子ども食堂」を区内3か所(かさい・もも・えどがわ)につくり出しました。

地域の活動に賛同する市民との出会い

江戸川地域協議会は、2024年に第2期市民版地域福祉計画を策定。いろいろな世代が集える居場所を求める声に応えた居場所づくりを計画に反映しました。この計画を進める舞台となったのが昭和初期の古民家「好日荘」でした。好日荘



マンション敷地内に残る小さな隠れ古民家「好日荘」

は都営新宿線「船堀駅」から徒歩12分。道幅も広く、江戸を感じさせる外灯や石碑がある緑の多い落ち着いた感じの町並みは、「住んでみたいまち」として若い世代に人気です。かつて江戸川区一帯は低湿地帯で水害の常襲地でした。1964年公選制で選ばれた中里喜一区長は、区民と行政が協力して水害の無い住みよい地域づくりを目指し、日本初の親水公園のあるまちを実現しました。子育て世代のための「保育ママ制度」を導入するなど、独自の福祉のまちづくりも進めた地域です。

「好日荘」は2014年に建てられた「子育てマンション」と呼ばれる子育て世代向けのマンションの敷地の奥に、見事な枝垂れ桜や柿、白梅などに囲まれ、ひっそりと建っています。川沿いに建てられた書齋を移築してきたもので、本棚には古い書物がたくさん並んでいます。

この子育てマンションのオーナーの中里さん(中里区長の親族の方)は、マンション1階のテナ



好日荘では、「もも」が提供するランチが食べられます



書棚には、古書が並びます

ントにはこのマンションにふさわしい団体に入ってもらいたいと探していました。地域で子育てや家事支援などをする「もも」に声を掛けてくださり、「もも」の事務所と「まちカフェひろばもも」が入居し、地域福祉の拠点となっています。

「江戸川古民家プロジェクト」始動

そのような活動の中で、居場所づくりの場として中里さんが所有する「好日荘」が借りられることになったのです。本格的に居場所づくりを進めようと、江戸川地域協議会は「江戸川古民家プロジェクト」を立ち上げ、参考になる居場所の視察研修などもしました。

メンバーたちが描く居場所のイメージ

- *誰でもふらっと立ち寄りくつろげる自由な場
- *寺子屋みたいな子どもたちの学習や子育て支援
- *茶道やお花など、趣味をいかした教室スペース
- *囲碁や将棋を楽しむ場
- *読書スペースみんなの本棚「読んで処よんでこ」など

予期せぬ困難を乗り越えて前進をする

具体的な計画を立て始めていた2024年秋に「好日荘」は台風で屋根に大きな被害を受けました。11月には居場所の運営団体「yoki(よき)好日荘」を設立し、多額の修理費を調達するために生活クラブ関連の助成金や疑似私募債の利用などが提案されました。残念ながら、助成金の申請には間に合いませんでしたが、次回の助成に希望を託し、2025年2月に予定している好日荘での集会以、より大勢の人の参加を募る機会にしようと話合っています。

江戸川地域協議会に集う人々は、20年前に高齢者のシェアハウスとコミュニティレストラン「江戸川ほっと館」を立ち上げています。莫大な建設費のために、100人を超える人々の力を集め、その熱意が信用金庫の融資を可能にしました。まだクラウドファンディングが無い時代です。そんな経験を持つ人たちですから、底力に期待できます。

30年以上になる長年の活動を地域の人々が見ていて、中里さんのように応援して下さる方が出てきたのです。好日荘の運営について中里さんは「どうしたら将来的にも皆さんに負担がかからないか、色々勉強しました」と話し、「その気持ちが嬉しい」とメンバーたちは言います。

居場所づくりに関心が高まる今、今回の訪問で、「好日荘」が居場所として賑わい、人の繋がりが広がっていく一つのモデル事例になると感じました。

取材：武田一恵、細谷正子
(東京ワーカーズ・コレクティブ協同組合理事)



子育てマンションの1階にある「たすけあいワーカーズもも」と「まちカフェひろばもも」の入り口

2011 年 3.11 東日本大震災から 13 年が経過しました。東京ワーカーズ・コレクティブ協同組合は、2012 年から「現場に立って考えよう」を合い言葉に、被災地訪問を毎年続けてきました（コロナ禍の時期はオンライン交流を開催）。

2024 年度は昨年に続き福島を訪問しました。昨年、初めて訪問したいわき市を中心にした日帰り企画で市内 4 か所を訪問。東京ワーカーズ・コレクティブ、WNJ（ワーカーズ・コレクティブネットワークジャパン）との共催企画で、東京、千葉、茨城のワーカーズメンバー 17 人が参加しました。

いわき市は地震と津波に加え放射能汚染もありました。また事故を起こした福島第一原発直近の町からの避難者の受け入れという現実が、福島県内の人々の分断という問題も引き起こしていました。

4 か所の訪問を通して、お話を伺った皆さんが、未来に目を向けておられることに勇気をもらいました。

認定 NPO 法人 いわき放射能市民測定室たらちね

木村亜衣さんのお話

2011 年 11 月 13 日開所。被災地の母親たちが、家族と子どもの命を守るため、安全な食材を求めて生きるための放射能測定を始めました。現在は除染水の海洋放出を始めた海のトリチウムなどの定点観測調査を行っています。



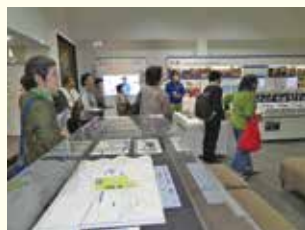
海水をくみ上げてトリチウムの検査



たらちねの放射能測定器

いわき震災伝承みらい館

震災後市が建設した伝承館。解説してくれる職員の方も常駐しています。震災の記憶や教訓を風化させず確実に後世へと伝えていくことにより、危機意識や防災意識の醸成を図ることが目的です。



元禄彩雅宿 古滝屋

1695 年（元禄 8 年）創業の旅館。震災後、地域づくりの仲間と協力して水や食料の配給体制を整え、避難所



の炊き出しに参加。ボランティアの宿泊場所として協力。9 階の原子力災害考証館、子どもと原子力災害保養資料室「ほよよん」を見学しました。

木村紀夫さん（大熊町・語り部）のお話

大熊町で津波と放射能汚染のなかで行方不明になられたご家族を探し続けられています。震災当事者としての語り部活動を通し、多くの人に経験を通して子どもから大人まで「てんでんこ」の大切さを伝えています。



ととろ 兎渡路の家 (木村眼科クリニックの研修施設)

木村肇二郎院長、木村恵子副院長のお話

2021 年 1 月、視覚障害者が気軽に集うことができる「兎渡路の家」を開設。閉じこもりがちになる視覚障害者が社会と触れる様々な企画を主に木村恵子さんが行っています。



ととろにて、徳雲さんと歌を歌う

田中徳雲さん（南相馬市同慶寺のご住職）のお話

「福島の今」を全国に発信する活動を行っています。ご自身の過ごしてきた経歴から、様々な出会いが今の自分を作っています。各々が直面した時の判断をしなければならぬときは、自分で決断できるように、普段から準備することが必要ではないかと…ご住職ならではのお話を聞きました。



東京ワーカーズ・コレクティブ協同組合情報誌「せれくと」No.98

〒160-0021 東京都新宿区歌舞伎町2-19-13 ASKビル5階

TEL:03-3207-1941 FAX:03-3207-1945

E-mail office@tokyo-workers.jp

http://www.tokyo-workers.jp

発行日 2025年1月31日

編集 ワーカーズ・コレクティブ 企画編集のもの

年間購読料 600円（年4回発行）